

## 盛岡藩の罪と罰雑考（二）

著者	吉田 正志
雑誌名	法学
巻	82
号	5
ページ	132-101
発行年	2018-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00124247">http://hdl.handle.net/10097/00124247</a>

## 盛岡藩の罪と罰雑考（二）

吉田 正志

はじめに

### 第一章 死後の世界と裁判・刑罰

第一節 亡魂が密通を告発

第二節 墓所で判決申し渡し

第三節 墓に板囲い

第四節 屍仕置とは何か？

### 第二章 死刑制度の諸特徴

第一節 各種処刑場

第二節 「鋸挽之上磔」の不採用

第三節 放火犯への刑罰は火罪にあらず

第四節 据物師の身分（以上八二巻四号）

### 第三章 手前仕置と仲間仕置

第一節 手前仕置——その一・給人

第二節 手前仕置——その二・武士の親類

第三節 手前仕置——その三・百姓、町人

第四節 手前仕置——その四・主人

第五節 無礼討ちの作法

第六節 座頭仲間の仕置

第七節 山伏仲間の仕置

第八節 乞食仲間の仕置（以上本号）

### 第四章 責任能力と刑罰の減輕

第一節 乱心の取り扱い

第二節 幼年者は数え十五歳未満

第三節 飢饉時の盗み

第四節 内済の可否

### 第五章 追放刑と身体刑

第一節 場所が指定された追放刑

第二節 新田・鉾山への追放刑

第三節 身体刑の不採用

### 第六章 犯罪捜査の諸手段と護送・牢

第一節 現金を掲示した囑託札

第二節 人相書

第三節 目安箱の変遷

第四節 死にくじと神判

第五節 目明しの公認

第六節 護送体制と大名家格

第七節 牢の諸相

おわりに

## 第三章 手前仕置と仲間仕置

## 第一節 手前仕置——その一・給人

## 刑罰権の藩主への集中

江戸時代の統一政権である江戸幕府は、各大名にほぼ完全な刑罰権を認め、その藩の家臣・領民が罪を犯したときは、その藩の法に基づいて裁判をし、有罪と認定されたら、幕府の許可を得ることなく死刑をも含む刑罰を科すことを許していた。<sup>1)</sup>

ところが、大名は、自分の家臣が領民を勝手に罰することを一定の例外を除いて極力排除し、刑罰権を大名＝藩主に集中しようとした。江戸時代の多くの藩は家臣を城下に集めて、給料は藩の蔵から米を支給するようになったから（これを俸禄制と呼んでいる）、家臣のもとに領民が配されること自体がなくなり、したがって、家臣が領民を罰するということもなくなった。

しかし、一部の藩では家臣に領地と領民を与える体制を採った（これを地方知行制<sup>じかち</sup>という）。この体制では家臣が領主としての性格を失わないわけだから、その領民が罪を犯したとき、それを罰するのは領主である自分だという意識をもちやすくなる。このような家臣のことを給人と呼んでいる。一方、藩主としては、自分がその藩の主人であり、

その藩の領民の支配者なのに、家臣が勝手に領民を罰しては困ると考える。なぜなら、自分の知らない間に領民が死刑になったり追放されたりしたら、年貢を納める領民が減ってしまうのだから。

そこで、領民への刑罰権を維持したいと考える家臣と、その刑罰権を家臣から剥奪して藩主に集中したいと考える大名との間に確執が生じることがある。例えば、幕末まで地方知行制を採用した仙台藩（伊達家）では、二代藩主忠宗<sup>ただむね</sup>の代の寛永十四年（一六三七）に、とくに一門と呼ばれる上級家臣の刑罰権を制限しようとするが、家臣の抵抗にあつて容易に実現しなかった。だが、仙台藩の存亡にかかわるお家騒動である寛文事件（＝伊達騒動）が幕府の介入によつて何とか収束して、上級家臣の力が衰えた元禄十四年（一七〇二）に至つて、ようやく上級家臣の領民に対する刑罰を縄懸けや押し込めといった軽い拘禁刑だけに制限することに成功する。つまり、死刑や追放といった重い刑を申し渡し執行することができるのは藩主だけとなったのである。<sup>2)</sup>

盛岡藩は、家臣の給与支給形態を地方・金方・現米・扶持方としており、やはり地方知行制を採用している。地方を支給されている家臣数は、天和二年（一六八二）では全家臣数三六五一人中五九七人、また享保期の給所高合計は一〇万一九九一石余だったようなので、相当広い地域が給

人支配地だったといえよう。<sup>(3)</sup>そして注目したいのは、この給人は、藩の許可を得さえすれば、給人が自分の領民を死刑にすることができた点である。これを手前仕置（自分仕置）といっている。このことについて、以下検討する。

### 死刑判決はどのように下されたか

今「藩の許可を得さえすれば」というあいまいな言い方をしたが、死刑が執行されるためにはその前に死刑判決が下されることが必要である。つまり、被疑者が裁判を受けて、「お前は死刑だ」と宣告されねばならない。現在のわたしたちの感覚だと、被告人が裁判官の前に立って、裁判官から直接口頭で死刑を宣告されるのが当然と思うが、少なくとも近世前期の盛岡藩の裁判ではこの前提が成り立たない場面があるように思われる。このことは、別に詳しく調べなければならないが、ごく簡単にいうと以下の通りである。

盛岡城下ないしその近辺で生じた殺人事件などは、町奉行や目付といった役人が裁判官となつて会所（のちの評定所）と呼ばれる法廷で裁判が行われ、そこで被告人の有罪が認められれば死刑判決が下されるが、城下から遠く離れた場所、例えば下北半島や沿岸地帯などで生じた殺人事件などは、その地の代官や給人が被疑者を捕らえて尋問し、その供述書や自分の意見書のみを盛岡城下の会所に送っ

て、被告人の身柄はその代官所等に留めおかれている。

つまり、遠隔地においては実質的な裁判は代官や給人が行い、城下の会所では書面審理だけが行われ、それで有罪と判断すると代官や給人に対して被告人を死刑に処すよう指令されるわけである。近世後期になると、被告人を城下まで護送してきて会所で裁判が行われることが多くなるが、近世前期ではそうでなかったのである。このことは何も給人の手前仕置に限ったことではなく、近世前期の盛岡藩の刑事裁判全体に共通することなので、頭の片隅に留めておいていただけると幸いである。

### 給人手前仕置の具体例

さて、給人の手前仕置事例はかなり多くみられるので、前期・中期・後期に分けていくつか紹介しよう。

#### I 前期の事例

① 『雑書』延宝二年（一六七四）四月十八日条（三卷、

四六〇頁）

团治部左衛門の給所（『知行所』である村（村名不明）の惣百姓十五人が連判で、同村の肝煎助八が百姓より徴収した諸役金を取り込んでゐる（『横領している』）と治部左衛門に訴え、この訴えを受けて治部左衛門が穿鑿した結果、肝煎助八とその弟の助二郎の取り込みが事実と判明したので、この二人を成敗したいと治部左衛門が藩に上申し、こ

れが許可されている。この事例では給人が裁判を行って、その結果に基づいていかなる刑罰を科すかも給人が提案し、藩の裁判役人が提出されたその書類を審査して、最終的に諸役金の取り込みを行った肝煎兄弟の死刑執行を給人が行っているのである。

②『雑書』元禄八年(一六九五)三月十一日条(六巻、四八四頁)

藤村清左衛門の知行所である上飯岡村(盛岡市)勘四郎が先月二十三日の晩に女房を切り殺し、今月九日には赤林村(矢巾町)の御藏(藩直轄領)百姓の久之丞(勘四郎の甥)も切り殺した。これは勘四郎が乱心したためで何の意趣もないということを、給人の清左衛門と代官の関弥五左衛門・松岡長十郎と一緒に藩役所に出頭して上申した。藩は、病気でこの事件が生じたのならばこちらで仕置を申し付けることはない、清左衛門の百姓だから心次第にせよと申し渡した。このケースは藩直轄領との関係もあるので、代官も関与している。また乱心での殺人ということも考慮しなければならぬが、最終的には知行所の百姓のことだから給人の心次第にせよと、その処置が給人に委ねられた。給人とその給所百姓との結び付きの強さが窺われる事例である。

以上二例だけ掲げたが、給所百姓が罪を犯した場合、その事実の糾明は給人が行い、その結果を藩に報告し、それ

を受けて藩が直接刑を執行せず、その仕置を給人に委ねるという手続が成立していることが分かる。

しかし、最初からこのような強力な給人による知行所百姓支配が成立していたわけでもないだろう。例えば、『雑書』慶安五年(承応元、一六五二)三月二十日条(二巻、六〇八頁)に、給人に筋目のない目安を出した百姓どもに對して、藩がいつものように地頭に奉公せよと命じるとともに、「若堪忍不成候は、地形地頭へ返可申候、他領へ逃候は引返、御成敗可被仰付」と申し渡しているが、これは、他領に逃げさえしなければ、給人へ田畑を返してその支配から脱することを許すという意味に理解できるので、初期においては、百姓にはその給人の下にいるか否かを選択する、すなわち去留の自由が認められていたといえるのではないか。

## II 中期

享保く安永期(二七一六く一七八〇)を一応中期とする、この期には給人の手前仕置事例が少なくとも十三件ほどみられるが、すべて掲げるのは煩雑になるので、ここでも典型的な二事例と、いささか特殊な一事例を紹介する。

③『雑書』享保十二年(二七二七)八月二十四日条(二巻、四七三頁)

沢里十之丞の知行所である米沢村(二戸市)の百姓平八

は、数年不届き者で役錢も納めず、親不孝であるうえ兄の小三郎をたびたび打擲して疵付けたりするので、小三郎・惣百姓の願い出を受けて、給人が平八を自分仕置したいと書類を提出した。この書類を藩役人が吟味し、平八は「弥申上候通不届もの二付、願之通十之丞二被下候間、知行所にて仕置仕候様」に命じられた。

④『雑書』寛延元年（二七四八）十月十三日条（二〇卷、

五〇四頁）

野々村三十郎の知行所（村名不明）の百姓太郎兵衛は不行跡者のため、村中で数度意見したけれどもいうことを聞かず、親不孝がひどくなったと老母・肝煎・惣百姓が申し出たので、詮議したところ相違なく、「百姓共掟ニも仕度候条被下置度旨、於知行所手前仕置申付度」と給人が上申し、藩はこの願いを認めた。

以上二例が中期の典型的な給人の手前仕置事例で、この外の例を含めると、この段階では、藩の許可を得て、ないしは藩の指令を受けて、給人が知行所の百姓を手前仕置する制度がほぼ定着しているといつてよいだろう。このことは、『雑書』宝暦六年（二七五六）八月二十九日条（二三卷、五五〇・一頁）で、<sup>花巻</sup>花巻の給人三人が、それぞれ自分の知行所の百姓三人が花巻で打首、獄門に処されたことに関連して、花巻郡代まで恐れ入るとして「差支<sup>ちか</sup>」を願ひ出て、それには及ばないと申し渡されていることから窺え

る。つまり、知行所百姓を手前仕置する権限の裏返しとして、百姓が罪を犯した場合は、給人がいれば監督不行届きとしてその責任を負わねばならなかったのである。

⑤『雑書』明和二年（二七六五）十月二十二日条、十一

月朔日条（二六卷、一一〇・一頁、二四頁）

中野政之助より、知行所百姓の十歳・亀松・久太郎の三人が土蔵を破つて盗みを働いたことが詮議の結果明白になった旨、<sup>花巻</sup>花巻（鹿角市）の家来どもから報告があったため、「右三人之者共被下置度奉願上候、願之通被 仰付被下置候ハ、手前ニて相片付申度奉存候」との口上書が提出され、この願いが許可された。これだけみれば、これまでの給人による知行所百姓の手前仕置事例と何の変わりもないが、いささか特殊なのはこの口上書を提出した中野政之助の職責で、彼は花巻に配置された盛岡藩の重臣で、秋田藩（佐竹家）との国境の守備を委ねられた家臣である。その任務遂行のため、通常の給人以上に強力な百姓支配権を認められていたようで、おそらく近世前期に同地に配された家臣は、このような願いをわざわざ提出するまでもなく、心次第に手前仕置していたかもしれない。

この点はまだ十分に調査していないが、近世前期には、花巻城代（郡代）だけでなく花巻城代（郡代）も強い支配権を認められていたし、さらには遠野の南部氏はいわば支藩的な性格を有していたともいわれるので、これらの家臣

については別に検討する必要があるということだけを、ここではお断りしておきたい。

### Ⅲ 後期

後期の給人による知行所百姓の手前仕置の事例としては、次の一件を確認できる程度である。

#### ⑥ 『雑書』寛政九年(一七九七)二月十一日条(三六卷、

二五七頁、『刑事』八九九・九〇〇頁

野田理右衛門の知行所百姓である川又村(盛岡市)の久治養子孫の三部が養母と密通したことを養父多七が見届け、割木で打擲したところ、養母は逃げ出して近くの木で首を吊った一方、三部は捕り押さえられてその旨代官へ報告がなされた。三部は盛岡へ送られて密通の事実が認定された。そこで野田理右衛門より、三部には他にお上への無調法はないので、「為見メ頂戴、於知行所手前仕置仕度旨」の申し出があり、これが認められた。

わたしが気付かない給人による知行所百姓の手前仕置事例がないとはいえないが、総じてこのような事例が中期と比べると非常に少なくなっているように思われる。その原因についてはさらに詳細に調べてみる必要があるが、おそらく藩中央の裁判機構が次第に整備されて、仕置権を含めた刑事裁判権が藩に集中されたためではないかと推測される。

### 給人手前仕置の消滅

これは何も給人の手前仕置権に限らず刑事裁判権一般にいえることなので、機会を改めて別に詳しく論じたいと思うが、簡単にいうと、これまで裁判は町奉行と目付によってなされていた。ところが、宝暦十一年(二七六一)五月十六日に側頭の向井伝左衛門と目付の小向才右衛門が、そして翌十七日に岩館甚右衛門が、公事方御用懸かりに任命されて、町奉行・目付と公事方御用懸かりが相談して裁判を処理する体制が作られた(二五巻、五七頁)。すでに延享元年(一七四四)前後より、被疑者の身柄を盛岡に護送してきて盛岡の会所で裁判に付す体制が次第に整備されたらしいが、これに伴い藩主からの判決執行命令は代官・給人ではなく、町奉行と目付に対してなされるようになる(例えば、『雑書』天明二年(一七八二)十月二十七日条(三一巻、一九六頁、同年十二月二十三日条(同上、二三九頁)、天明三年(二七八三)四月九日条(同上、三一〇頁)など多数)。

こうなると、被疑者の身柄は現地に留めておかなくなるわけだから、その仕置についても藩の手で行うことが通例となり、城下はもちろん犯罪発生地や犯人居住地での処刑である所仕置も、藩の役人である代官によって執行されるようになる。おそらく『文化律』が制定され、評定所が設置される文化五・六年(一八〇八・九)になると、藩の裁判機構の整備はさらに進み、給人に仕置を委ねることはな

くなくなったのではなからうか。この点、さらに追究してみた。  
い。

- (1) 平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』（創文社、一九六〇年）三頁以下、服藤弘司『刑事法と民事法』（幕藩体制国家の法と権力Ⅳ、創文社、一九八三年）一二八頁以下、などを参照。
- (2) 吉田正志『仙台藩の罪と罰』（慈学社出版、二〇一三年）「評定所格式帳」のはなし」（一〇頁以下）参照。
- (3) 岩手県編『岩手県史』五巻・近世篇二（岩手県、一九六三年）八一七～二二三頁。
- (4) 菊池悟朗『南部史要 全』（四版、熊谷印刷出版部、一九七二年、初版は一九一一年）七四頁は、寛永四年に八戸の領主八戸直義が治安状況の悪い遠野に移され、その後治安改善に努めた功績により、遠野における罪人の処罰は、盛岡藩主に何うことなく詮議のうえ適宜処置してよいとの命がくだされ、「これよりして八戸氏は陪臣にして自ら刑罰を行ふこと諸侯に同じ」と記す。
- (5) 公事方御用懸かりについては、守屋浩光『盛岡藩「公事懸御役人」について』（藩法研究会編『大名権力の法と裁判』（創文社、二〇〇七年）所収）を参照。

## 第二節 手前仕置——その二・武士の親類

### 子に対する親の懲戒権

『文化律』第八九条「親不孝者御仕置之事」はその第一項で、行状がよくなく、親へ切り懸かったり打ち懸かったりした不孝者を親が申し出た場合は、その不孝者を獄門と

する、第二項では、切り懸かり打ち懸かりはしないけれども、両親のいうことを聞かず、行状のよくない不孝者であることを親が申し出た場合は永籠とする、と規定している。この条文は親に対する不孝者についての処罰規定だが、別に親不孝でなくても、さまざまな悪事をして手に負えないような子についても、親はその子を懲戒することができ、これは何も江戸時代だけでなく、ごく限られた範囲ではあるが、現在でも子に対する親の懲戒権は認められている。<sup>(1)</sup>さらに、日本だけでなく、儒教倫理のもとにある中国などはもちろん、諸外国でもある程度は認められていると思われる。

盛岡藩でも不孝者や悪事を働く子に対する懲戒はよくみられることで、とくにそのような子を追放してほしいと藩に願ひ出る事例は、それこそ枚挙にいとまないほどたくさんある。さらにはその子を殺してほしいという極端な願いが出され、その願ひに応じて藩がその子を死刑に処している例もある。このような例については別の機会にでも触れることにして、ここでは親や親類が自分の手でそのような子を殺害するケースを取り上げる。まず武士の場合である。

### 具体的事例

- ① 『雑書』元禄五年（二六九二）八月二十五日条（六巻、



九一・二頁

同年六月二十五日付けで、川口弥兵衛・川口宇太夫連名の次のような願書が目付宛に提出された。宇太夫の嫡子勝之助（十七歳）は常々悪人で、種々意見をしても一切聞き入れず、六月十七日に欠落し、同月二十一日には福岡村（二戸市）<sup>（二戸市）</sup> 辺りから立ち戻ったような次第で、「末々対公儀無調法も仕候節迷惑奉存候之間、只今成敗仕度奉存候」と。この願いに対して藩は八月二十一日付けで許可を与えている。この事例では、親の宇太夫や親類の弥兵衛が勝之助を手前仕置したと直接書かれているわけではないが、代官などの藩役人の関与がなさそうなので、親と親類の手によって仕置されたといえるであろう。もともと、このような場合には徒目付が検使として遣わされることがあるので、まったく私的に処理されたともいえないかもしれない。

② 『雑書』天明五年（一七八五）三月二十八日条（三三卷、三四九・五〇頁）、『刑事』七二四頁

これは、中村弓藏の親で隠居の中村源太夫が山岸村（盛岡市）喜六養育の姪「えん」と愛宕山（同）<sup>（あたごやま）</sup> で相対死（『心中』）を図り、「えん」は剃刀で切った疵がもとで死亡した一方、源太夫は、本来は入牢に処されるべきところ、剃刀で深手を負っていたので親類に預けられた。なお、心中の際源太夫は帯刀しておらず、身分に似合わない致し方だと

八

して雑人（『庶民』）に落とされている。この源太夫を預けられた親類四人は四月十一日に、源太夫は重々無調法者なので、「此上 御上へ御苦勞奉懸上候儀、恐多奉存候間、不苦御儀御座候ハ、私共へ被下置度、左候ハ、親類共相寄相片付申度旨」を申し出て、これが許された。

この親類による源太夫の仕置がどのようになされたのかの記述はないが、たぶん親が親類の誰かの手によって首を刎ねられたものと思われる。手前仕置の理由として源太夫が重々無調法者だということと、お上に「苦勞を懸けるのは申し訳ない」ということが挙げられているが、百姓の姪と心中し、しかもそれをし損なつたとは恥ずかしいという親類の面子もあつたかもしれない。

③ 『雑書』寛政二年（一七九〇）五月二十三日、六月三日、六月九日条（三四卷、九四頁、一〇〇頁、一〇二頁）、『刑事』七七七・九頁

中川原判平の嫡子条助が去年七月より病氣となり、実父安宅七右衛門へ遣わされて養生していたところ、今年正月二十二日の夜に乱心し、七右衛門嫡子小平太の妻を理由もなく切り殺したため、判平の親類に預けられた。ところが、条助を預かるには居宅が狭いので揚がり屋を拝借しないと親類が願い出て許されるとともに、本来ならそのとき手前片付けも願ひ上げるべきだったのだが、小平太が石巻（仙台藩領）勤番で二月末に戻ったところで、七右衛門親類

や殺された妻の里方などとも相談して、「御上へ御苦勞懸上候儀重畳奉恐入候間、親類共立合手前片付仕度旨」を、三月晦日に口上書を提出して願ひ出、これが五月二十三日に認められた。

これを受けて六月三日に親類より、六月九日か十日に手前片付けをしたいが支障があるかどうか、またその節には見届けをしてほしい旨の願ひが出され、十日は公儀の日柄なので九日に執行すること、当日は徒目付を派遣することとの回答があり、これに沿って九日朝に判平居屋敷で親類どもが立ち合い、見届けのため徒目付が派遣されて、支障なく仕置が執行された。

### 手前仕置を認めた理由

わたしが気付いた武士の親類による手前仕置事例は以上の三例だけで、ここから何か結論めいたことを導き出すことは困難であるが、②と③ではいづれもお上にご苦勞を懸けるのは恐れ多いといっていることが注目される。

というのは、藩は本来刑罰権を集中したいと思っているはずであり、第一節ですでに述べたように、家臣や領民が死刑を執行することを禁じ、それは藩自身が行うことだと主張するのが自然だと思ふからである。実際、行状のよくない子どもを成敗してほしいという親や親類の要請を受けて、藩がその者を死刑に処している事例はいくつもあり、

それが藩の苦勞になっていとは思えない。もちろん死刑執行の数が少ないのは望ましいことだが、死刑を公開してみせしめにすることも狙っていたから、親類の願書が強調するほどには死刑執行が藩の面倒になっていたわけではないのではないか。

となると、手前仕置（『手前片付け』を認めるかどうかには何か統一的な基準があつたのではなく、その個々の事例に即して判断されたのではないだろうか。そして、②の場合は百姓の姪との心中のし損ない、③の場合は乱心による実家嫡子妻の殺害という、武士としての体面を汚すような事件であり、これは本来親や親類が阻止すべきである、それをできなかったのだから親や親類の手で子どもを殺させるといふ、親・親類への制裁の意味も含まれていたのではないかと思うが、いかがだろうか。

（1）例えば、現行民法第八二二条は、「親権を行う者は、第八百二十条の規定による監護及び教育に必要な範囲内でその子を懲戒することができる」とする。

### 第三節 手前仕置——その三・百姓、町人

#### 具体的事例

ここでは早速、百姓、町人が手前仕置した事例を挙げることから始めよう。

## ① 『雑書』 元文四年(一七三九) 三月七日条(一七巻、

二九頁)

南伝法寺村(紫波町)の伝次郎の子伝七(三十歳)は、この一、二年どこで暮らしているのか分からず、時々親の所に顔をみせる程度で、もつてのほかいたずらをする不孝者なので、「永く指置候得てハ、御村妨ニも罷成候不行跡者ニ御座候間、右親類共并組合之者共へ伝七被下置度旨」の願書が代官の末書を付けて提出され、願いの通りとなつてゐる。この事例ではただ伝七を親類・組合に下されたいというだけで、手前仕置にすると記述されているわけではないので、遠方への追放ということも考えられるが、そもそも住所不定というような不行跡者を追放したら、追放先でどんな悪事をしてかすか分からないから、たぶん手前仕置に処したものだと思われる。

## ② 『雑書』 元文四年三月二十三日、二十六日条(一七

巻、三四・五頁)

これは①と同年同月の事例で、木村道順という者の弟半六に関する仕置例である。この木村道順なる者は苗字を名乗っているし、弟半六が大小を帯びていなかったのは不埒だと非難されてもいるので、彼らは武士だったとも考えられなくはないが、半六は八幡丁(盛岡市)の者ともいわれているので、断定はできないものの、木村道順は町医者者だったのではないかと推定しておく。

一〇

さて、その内容だが、半六はかねて伊勢参りを心懸けていたようで、兄の所から出奔したが途中で発見されて捕らえられ、八幡丁検断へ渡された。この半六は普段から博奕をしたり数寄をしたりで、兄が何度意見しても聞く耳をもたない不埒者のため、兄道順へ預けられることになる。半六を預けられた兄道順は、早速この半六は「不行跡者ニ御座候間、内々ニて片付申度候間、右半六被下置度」いと願ひ出、「勝手次第片付」けよと命じられている。この事例でも手前仕置の具体的な記述はないが、勝手次第に片付けよとは、とりもなおさず手前仕置せよとの内容だったに違いない。

## ③ 『雑書』 延享元年(一七四四) 四月二十七日条(一九

巻、八七・八頁)

伝法寺村(紫波町)の助作が当村百姓三九郎所へ忍び入って、衣類二品を盗み取ったことを白状したことについて、助作の親類・組合が、「御上へ御苦労相懸申義も迷惑奉存候、尤、時分柄田畑仕付之節何共迷惑奉存候間、恐多申上様御座候得共、内々ニて如何様にも相片付申度候間、私共へ被下置度旨」の願書を出した旨代官より報告があり、この願いが聞き届けられている。もつとも、代官が見届けるようにとも命じられている。この事例では、単にお上にご苦労を懸けたくないという理由の他に、田畑の仕付け時期のため迷惑という理由も付されている。

(623)

④『雑書』寛延元年（一七四八）十二月二十六日条（二

〇卷、五四九頁）

藤沢村（北上市）の百姓清太郎が先月十五日に欠落したものの、今月二十一日に立ち帰り、高田村（陸前高田市）の助之丞所へ盗みに入つて、すぐに捕り押さへられた。この事件を受けて清太郎の五人組より、「月迫ニ罷成候ニ付、五人組合之者へ被下置度、被下候ハ、内々ニて雑害仕度旨」を代官の末書をもつて願ひ出て、この願ひが認められた。この事例は、十二月二十一日に捕らえられて二十六日に願ひが認められているから、おそらくまともな裁判が行われず、単に事件の経過と願ひが代官に出されただけと思われる。年末だからという理由がどれほど重視されたのか分からないが、ここでも時期が問題とされている。

⑤『雑書』寛政三年（一七九一）三月六日条（三四卷、二五一頁、『刑事』七九二頁）

田子村（田子町）百姓伊伝治（三十歳）が二月二十日に弟を切り殺し、両親と女房へも疵を負わせたため、重い成敗になるべきところ、当村は「困窮之御村方故、表立御成敗ニては迷惑仕候付、親類并御村方御百姓共へ被下置度段、一統願出候付、御憐愍を以被下置、去月廿九日、右御村方ニて成敗為仕」たと、代官の末書をもつて報告があった。なお、検使として代官の下役が見届けたことも報告されている。

この事例でも、事件発生から九日目には成敗されているので、おそらく藩の許可を事前に得たのではなく、代官の判断で手前仕置を認め、成敗後に藩へ報告されたのではないかと推測される。そうなると代官の権限がどうだったのが問題になるが、不行跡者を追放したいと代官が藩に願ひ出て、それが認められるケースは多くあるものの、代官の判断で死刑に処すという例は、この⑤以外にみられないように思われる。何か特別な理由があつて、この事後報告が認められたのだろうか。

手前仕置を認める理由

以上、百姓、町人が犯罪者を手前仕置した事例を五つ挙げたが、それが認められた理由としては、①・②はその者が甚だしいいたずら者、③は農繁期という時期、④も年末という時期、⑤は困窮村であることが挙げられている。だが、これらの理由は何もこれらの事例に特別にみられるわけではなく、他の犯罪においても多かれ少なかれ存在し得る理由である。となると、なぜこの五例に限って手前仕置が認められたのか、この点がよく分からない。手前仕置を認める何らかの基準があつたようにも思われないので、結局は個別具体的に判断されたというほかないようである。

ただ、藩による正式な裁判——身柄を盛岡まで移送すると否とにかかわらず——を受けるとなると、その間牢や町

宿に収容されるのが普通だから、そうなると第六章第七節で触れる通り、その間の食費などの経費（「牢賄い」）が必要となる。これが親類や五人組にとつては重い負担になったので、この負担を免れさせるために手前仕置を認めたのかも知れない。しかし、百姓による手前仕置は、たとえ藩から事前の許可を得たとしても、いわゆる私刑（「リンチ」）の要素を孕むから、藩の刑罰権が強固になるにつれて否定されていくのが自然であろう。幕末期には一体どうだったのか、さらに調べてみたい。

#### 第四節 手前仕置——その四・主人

##### 主人の手前仕置原則

いつ出されたのか分からないが、『御目付所御定目』<sup>おめつけしょごじょうめく</sup>という法令集に、「大小之諸士召仕并百姓、無調法有之手前仕置仕候者は、其趣願出可申事、附、手討ニ致候者は、其旨訴出候事」という法令が掲げられている（『藩法』下、六三五頁）。この法令の解釈にいささか迷うが、わたしは、「身分の高下にかかわらず侍の召仕や百姓に無調法があつて手前仕置したいときは願ひ出よ、すでに手討ちしたときはその旨を届け出よ」と解釈したいと思っている。つまり、侍には、主人として召仕を手前仕置したり、百姓を無礼討ちにすることが公認されており、原則はそれを事前に願ひ出て藩の許可を受けるべきであるが、事後の場合にも

それを届け出よ、と理解するわけである。

この解釈が正しいかどうか不安があるが、いずれにせよ主人である侍が召仕を手前仕置している事例は実に多くあるし、また無礼討ちの事例もいくつみられる。そこで、後者については本章第五節で検討することとして、ここではまず前者についてみることにしたい。

##### 事前申請の手前仕置

家来や召仕を手前仕置（成敗、手討ち）したいという願ひが出されて、それが許可されている例は、とくに前中期に非常に多くあり、そのすべてを掲げることとはできないので、三つほど紹介する。

- ① 『雑書』寛文二年（二六六二）十二月二十二日条（二卷、三二二頁）

横田左近右衛門が先年雇った中間の清六が取り逃げをしたが、請け人と人主が詫びたのでそのまま差しおいたところ、最近逃亡しようとしていることが分かり、そこで成敗したいと藩に願ひ出た。これに対して藩からは、「人主・請人ニ被相尋、申分無之上ハ、如何様ニ成共勝手次第可被申付由」との指示があった。この事例では、人主・請け人への連絡とその承認とが求められているが、これが常に必要だったのかどうか、必ずしもよく分からない。

- ② 『雑書』享保四年（二七一九）十一月晦日条（二二卷、

桜庭次郎吉の小者久太が、仙北町（盛岡市）の川原で本宮村（同）百姓太郎左衛門の娘を切り殺し、自身も自害しようとしたが死にきれなかった。これについて久太は無調法者なので成敗したいと次郎吉から書面が出され、「願之通勝手次第成敗可仕旨」の回答があった。これはおそらく相対死（＝心中）事件で、女は死亡したものの男は生き残ったわけだから、『文化律』制定以後は男は死刑に処されるケースながら、それ以前の相対死の判例では、どうもとくに男が処罰されたようにもみえない。したがって、この小者久太成敗の原因は相対死をしたことではなく、無調法な召仕に対する主人の手前仕置であると考えてよからう。

③ 『雑書』宝暦六年（二七五六）二月十二日条（二三卷、四一七頁）

高野平左衛門から召仕の金助に無調法があったので手前仕置したいとの上申があり、願いの通りと申し渡された。記事はこれだけで、どのような無調法があったのか、どのような理由で許可されたのかなど一切不明である。しかし、主人が無調法のある召仕を手前仕置する願いはかなり容易に認められているように思われる。

### 事後報告の手前仕置

一方、手前仕置したあとで藩に報告している事例も多く

ある。これまた少し紹介する。

④ 『雑書』承応元年（二六五二）十月二十七日条（二卷、六六四頁）

高屋吉之丞の召仕の源三郎が春木流しに行つて昨晩帰ってきたので、春木はどれほどあるかと尋ねたところ、一本も盗んでいないのにそのように尋ねるのかといったので、盗んだとはいっていない、ただ本数を聞いただけだと答えたのに対して何かと文句をいい、家を焼いてやるといつて焼きさしを取つて振り回すので、気でも違つたかと吉之丞がいったら、また氣違ひにするのかといったながら、「とひのはし」（＝罵口だろうか）をもつて打ちかかったので、どうしようもなく源三郎を切り殺したと上申した。春木というのは薪のことで、薪になるような木を川に流すことが行われていて、それを拾い上げるために源三郎が差遣されたのだらう。<sup>(1)</sup>この記事には上申に対する藩の回答が書かれていないが、おそらく異議なく認められたのであらう。

⑤ 『雑書』元禄十年（二六九七）九月二十二日条（六卷、九七〇・一頁）

大川平右衛門の家来長兵衛はかねてから不届きがあり、平右衛門の留守中に手作りの稲などを盗んだので、次男の岩之助が詮議したところ、さまざまな悪口をいったうえ棒でもって岩之助に立ち向かい、それを兄の平内が見掛けて即時に討ち留めた。この旨を平内が口上書で申告してい

る。この事例から、手前仕置は主人である平右衛門個人だけに許されるのではなく、主家である大川家の構成員ならばそれを許されたことが判明する。

⑥ 『雑書』享保六年(一七二二)正月二十三日条(二二卷、一五頁)

山屋三右衛門の召仕である中間に無調法があつたので叱つたところ、手向かいしたので見逃しがたく、手討ちにしたらと書付を提出して訴え出た。この記事はこれだけで詳細が一切不明だが、これまたそのまま訴えが認められたことと思われる。

### 藩が積極的に手前仕置を命じた例

以上のように、主人が家来を手前仕置する例は多くみられるが、なかには藩が積極的に手前仕置せよと命じているものもある。二つだけ例示する。

⑦ 『雑書』延宝四年(一六七六)二月十九日条(三卷、七三二頁)

阿部半七の召仕又吉は常々不奉公者で小盗などもするので、又吉の親類に又吉を返すと連絡したところ、又吉はかねて厄介者なので、このたびいたずらをしたのを幸いとしていかようにもしてほしいとの返答だった。半七としては又吉を成敗したいとは思ったが、そのようなことをしているのか迷ったので、又吉を他国へ追放してほしいと藩に願

い出た。ところが藩からは、「左様之徒者追放申付候ても立帰徒可仕候間、半七手前ニテ成敗可仕由」が申し渡された。

⑧ 『雑書』享保九年(一七二四)三月九日条(二二卷、八四一・二頁)

大釜八郎左衛門が、今月初めに三次郎を召仕に雇った際、道具を取りに親元に行きたいというのでそれを許したところ、在所の寺で看主と口論して寺を騒がす事態が生じた。この事件が代官から主人の八郎左衛門に報告され、三次郎は不屈き者なので詮議したうえでどうにでも仰せ付けられたいと八郎左衛門が藩へ願ひ出た。ところが藩は、「菟角三次郎徒ものニ候間、八郎左衛門へ被下候間、何分ニも手前仕置ニ仕候様」にと八郎左衛門に申し渡している。

江戸時代の大名は一般的には刑罰権を集中しようとするから、死刑執行も藩の手で行おうとする。しかし、上記⑦⑧の事例をみると、盛岡藩は、藩の手で死刑にしてほしいとの主人の願ひ出に対して、自分自身が死刑執行せよといっている。ここでも盛岡藩では手前仕置が広範に認められていたことが分かる。

### 特殊な事例

しかし、手前仕置に係わって処罰されたり、あるいはそ

れを許されなかったりした事例がないわけではないので、それを次に掲げよう。

⑨『雑書』正徳六年（＝享保元、一七一六）三月六日条

（一卷、七六～九頁）

本館甚之丞の父の代に雇った召仕権七が、甚之丞が若輩のため日頃慮外が多く、そのため甚之丞の伯父金右衛門が手討ちにした。しかし、「権七打留候段、小身者手打と申上候段如何御座候」と考え、親類などが相談のうえ、権七が盗賊に入って召し捕りに抵抗したため是非なく切り留めたと藩へ上申した。歩行目付の検使の結果この報告が虚偽と判明し、甚之丞とその母は他人預けとなり、金右衛門は盛岡を追放されている。この処罰は、正直に慮外者の召仕を手討ちにしたと藩に報告すれば何の問題もなかったのに、身分の低い侍が召仕を手討ちにするのはいかがなものかと考えすぎたために処罰されたものである。逆にいうと、たとえ軽輩でも不届きな召仕を手討ちするのは許されていたということになるう。

⑩『雑書』享保十八年（一七三三）四月六日条（二五巻、

二九一・二頁）

久慈金内が去春喜作を召し抱えたが、勤め振りがよくないため暮に暇を出した。しかし、その後無調法の筋のあることが分かり、直接尋ねる必要があるとして、当時諏訪寛兵衛方に雇われていた妻子を頼っていた喜作を呼び出した

が、それに応じず、そのため金内が寛兵衛宅に行って尋ねたところ、まったく無礼な対応だったため、やむなく討ち捨てた。

この件につき、金内は町奉行と目付の取り調べを受けたうえ遠慮を申し付けられている。このような取り調べを受けた理由ははっきりしないが、あえて推測すると、暇を出した元召仕を殺害したのは主人による手前仕置なのか、それとも一定の手続を必要とする通常の無礼討ちなのか、という問題があったのではないかと思われる。遠慮という処罰が加えられているところを見ると、純然たる主人による召仕の手前仕置ではないと考えられたのかもしれない。しかし、切り殺したのが寛兵衛宅の門前だったようなので、この点が問題視された可能性もあるう。

⑪『雑書』宝暦八年（一七五八）十一月十八日条（二四

巻、三三二頁）

鳥谷部嘉平太の田屋が九日夜に焼失し、内々調べたところ召仕の久之丞と三太郎が申し合わせて火を付けたと白状した。そこでお上に「苦勞をかけるのも恐れ入るので、手前仕置したい」と伺い出たところ、「右体之義科次第不申上無調法の儀有之候間、手前仕置仕度段願候得ハ勝手次第被仰付候、格別重キ科之次第申上候付、御詮議之内籠舎被仰付候」との回答であった。そのうえで、翌九年二月二十七日（同上、三六〇頁）に至り、久之丞・三太郎兩人に対し



て、落ち度を隠すため主人の家に火を付けたのは大胆至極の重科であるとして、町中引き晒し、小鷹殺生場において打首、獄門の判決が申し渡された。

この事例をみると、ただ無調法があつたとの上申ならば手前仕置を許したけれども、放火という重科を申告したからには藩が詮議して処刑するという藩の態度が窺われる。何となくこんないい加減なことでもいいのかなと疑問に思わないでもないが、重罪については藩が裁判して処罰するという方向が出てきていることは注目される。

だが、無調法の家来・召仕を手前仕置すること自体は決して否定されているわけではない。確かに、その後主人による家来の手前仕置の記事は、『雑書』寛政八年(二七九六)十月二日条(三六卷、一八〇頁)、『刑事』八八三頁を除いて、ほとんどみられないように思われる。しかし、これは単に記事として『雑書』等に収載されなくなっただけで、主人の家来・召仕に対する手前仕置は行われていたのではないか。実際、仙台藩(伊達家)は、家来を手打ちしても藩に届けるには及ばないといっているほどで、家来の身分を弁えさせるには、むしろ主人による家来手打ちを当然のこととして認めることこそ当時においては自然かもしれない。十九世紀の盛岡藩が、主人の家来・召仕に対する手前仕置をいかに取り扱っていたのか、さらに検討したい。

(1) 『藩法』上、四七八・九頁所掲寛保四年二月「春木御定目」参照。

(2) 吉田正志「仙台藩の罪と罰」(慈学社出版、二〇一三年)「七家来手打ちのはなし」(五六頁以下)参照。

## 第五節 無礼討ちの作法

### 『文化律』の無礼討ち規定

無礼討ちは、一般的には裁判をまったく経ないで行われるので、手前仕置とは質的に異なるものの、とくに前節で述べた主人による家来・召仕の手前仕置を念頭におくと、ある程度私刑(リンチ)的要素を有する点で手前仕置と近似的なので、ここで取り上げておこう。

さて、『文化律』第七五条「人殺并疵附御仕置之事」第四〇項は、次のような条文である。

一 足軽体二候共、軽き町人・百姓之身として、法外之雑言等、不屈之仕方、不得止事切殺候者 吟

味之上無紛二おゐてハ無構

すなわち、町人・百姓が、足軽を含む武士に対してひどい悪口などをいったりする不屈きがあつたので、やむを得ず切り殺したとき、審理のうえそれに間違いなければ、その武士には殺人の罪を問わない、というものである。この条文は江戸幕府『公事方御定書』下巻第七一条「人殺并疵附等御仕置之事」第四四項の条文をそっくりそのまま引き

写したもので、これがよく知られている無礼討ちの規定である。

『文化律』は文化五・六年（一八〇八・九）に制定された法典だが、無礼討ちは『文化律』の制定によって初めて認められたわけではなく、それ以前からあった法である。一例を挙げると、

① (i) 『雑書』享保十三年（一七二八）四月八日条

（一三卷、六三二頁）

栗谷川新兵衛が米内薬師（盛岡市）へ参詣して帰る途中、春木留め近所の川端で何者かに足を踏まれたので、無礼者と咎めたところ、何かと雑言して腕に取り付いたため、突きのけようと刀の柄頭で眉間を突き、ようやく腕を放させた。しかし、またまた飛びかかってきて脇差を奪い取ろうとしたためその者を切り殺した。この者は玉山長八の召仕の長九郎であることが判明し、長八のいうには、長九郎は常々不行跡者で、最近叱ったところ逃げ出してこのような次第になったとのことだった。町奉行と目付が詮議して、長九郎は不行跡者で、そのうえ侍に対して慮外不届きなので、死骸を人主に渡して片付けさせるようにと長八へ申し渡された。

この段階では、無礼討ちが問題なく認められているようだが、実は後日談がある。

(ii) 『刑事』一二六頁、三三二頁所掲享保十三年六月

## 二十六日記事

以上の事件を江戸の藩主へ申し上げたところ、無礼があったので切り殺したのはもつともだが、考えるところがあるので、結論が出るまで栗谷川新兵衛に遠慮を申し付けよとの指図があった。

(iii) 『雑書』享保十三年十一月五日条（二三卷、八〇四・五頁）、『刑事』一二六頁、三三二頁

この日の晩に栗谷川新兵衛に次のような仰せ渡しがあった。慮外した長九郎は酒に酔って無腰の者なので、捕り鎮めて近在の者へ預けておき、慮外の趣を主人の長八へ申し届けたのちに存念を達することができたのに、軽い者と考えて早速に切り殺したのは心得違いである、手に余って切り殺したのなら近在の者へ申し届けておき、その趣を親類を通して申し出るべきなのに、自身が直接登城して訴えたのは不案内である、その不届きによって閉門を申し付ける。

以上の経緯からみて、無礼討ちそれ自体はもつともだしながらも、別に切り殺さなくても対処の仕方があったはずで、それをせずに即座に切り殺したのは心得違いだ、またその藩への報告の手続も間違っているということのようである。報告手続の問題はさておいても、無礼があつたらすぐに切り殺してもよいというのではなく、できるだけ近在の者に預けるなど、ある程度穏便に取り計らうことが望

ましいと藩主の意向が窺われる。

### 無礼討ちによる処罰

これ以外にも、無礼があつたのは事実にしても、それへの対応が不適切とされて、侍が一定の処罰を受けている事例がみられる。

② 『雑書』宝永五年（一七〇八）十月二十六日条（九巻、

三九九頁、『刑事』八五頁

七戸儀右衛門の召仕勘十郎がさまざまな無調法をしたので暇を出そうと思い、人主・請け人を呼び出したところ、人主はおらず請け人の上田堤守の孫七が出頭した。儀右衛門が病氣だったので俵の勘之丞が対応したところ、孫七が何かと悪口をいったため堪忍なりがたく、みね打ちのつもりで打って三ヶ所に手負わせ、その疵が元で孫七が死亡した。このことが江戸に報告され、勘之丞へは逼塞を申し付けよと指示された。

③ 『雑書』享保五年（一七二〇）十一月二十七日条（一

巻、一〇六八・九頁）

当六月三日に赤沢庄左衛門預り御徒菅沼兵左衛門が上米内村（盛岡市）百姓の清之助・小三郎・小十郎の三人に乗り打ちされたため、清之助を切り殺した。残る二人も手向かったとして籠舎を命じられ、事件が江戸に報告された。江戸からは、清之助は切り殺され損、小三郎・小十郎には

一八

他領追放が命じられたが、兵左衛門も始末無調法などの理由で身帯取り上げに処された。

④ 『雑書』寛政七年（一七九五）十月二十日条（三五巻、

六六三頁、『刑事』八五一・二頁）

当八月五日に本三戸八幡宮（南部町）拝殿において、三戸給人雇地忠助弟惣太が永福寺知行所百姓沖田面村（同）門前の与五右衛門と口論し、過言をいい募つて慮外したため堪忍できず、与五右衛門を即座に切り殺した。この行爲に対して藩は、「右与五右衛門手向いたし候儀共相聞得不申候得ハ、外取計方も可有之候処、即座切殺候段、尤場所之弁も無之短慮至極無調法」であるとして、兄忠助へ預けて蟄居を命じている。

### 無礼討ちは侍の義務

一方、軽い身分の者に慮外されたならば、それを見逃さず打ち留めるべきことを強調する事例もある。

⑤ 『雑書』享和三年（一八〇三）十二月二十一日条（三

八巻、四六二・三頁、『刑事』九九一頁）

鍛冶町（盛岡市）の仕立屋勝之助が本年二月十五日に岩本理右衛門宅に來た。前年冬に一、二度來ただけで深い付き合いがあるわけでないのに、この日は案内も乞わずに來て炬燵にも入り、何とも作法ながら我慢し、もう夜更けだから帰れといったところ、泊まりたいと強いていうの

で、引き出すこともできずに居間の障子際に寝させた。しかし、ここは寒いので、そちらの屏風のなかへ一緒に入りたいと慮外をいい、着ていた布団を理右衛門夫婦が臥しているうへへ投げかけ一緒に臥せったりしたので、もはや我慢できないと、枕元においてあつた脇差で鞘打ちしたところ、勝之助が逃げ出して行方を見失った。

いささか理解しづらい内容だが、以上が事件の概要である。この件を理右衛門は訴え出なかったようだが、何らかの形で表沙汰になったらしく、藩から、「慮外有之難捨置次第二候ハ、打捨ニもいたし即御訴可申上候処、鞘打ニいたし取逃見失ひ候のみにて、御訴も不申上捨置候段、未練至極之儀、身分ニ不似合重々不始末之致方」であるとして、隠居・逼塞を申し渡されている。

⑥ 『刑事』 一一三頁所掲文政三年（一八二〇）十二月二十四日判決

四月十五日夜に八幡横丁（盛岡市）で、同丁の清助と鈍屋町（同）の与惣が喧嘩していたのを見掛けて、料理方の里見良蔵がそれを引き分けようと仲裁に入った。しかし、清助が聞き入れず、かえって不法を申し募って慮外したため、やむを得ず良蔵がみね打ちにするつもりで清助を打ち払ったところ、清助が逃げ出したので追い掛けたが見失い、そのまま捨て置いて引き取った。この件が問題となり、「軽者ニ慮外致され、打留も不仕、其上人え疵付候程

之儀を御訴も不仕、不始末至極無調法」で、きつと処罰すべきであるが、ご憐愍をもつて隠居と仰せ渡された。

⑦ 『刑事』 一一八頁所掲文政九年（一八二六）十月朔日判決

当六月二十七日に沼宮内通り門前寺村（盛岡市）柏木平の勝が雲石弥七の畑道を通つたのを、弥七四男の喜代松が見掛けて咎めたところ、かれこれ言い合いになって、勝が過言をいい募り慮外したため、喜代松が鹿鑓で勝の肩先を傷付けた。勝が逃げたので追い掛けたが見失いそのまま捨て置いたようである。この件も何らかの形で表沙汰になり、「軽キ者ニ被致慮外、用捨難相成程之儀ニ候ハ、打留可申処無其儀、不始末至極無調法」だとして、喜代松は親の弥七に預けられて逼塞を申し渡されている。

⑧ 『覚書』 慶応三年（一八六七）五月十二日条（慶応編、七六九頁）

三月十七日に佐藤孫市郎が新庄村（盛岡市）の観音祭祀に参詣した際、途中で呉服町（同）善八郎召仕の兼蔵が熟酔して理不尽に押し懸かった。論したけれども手向かいしたため、短刀で鞘打ちしたところ傷付いて逃げ去ったので、そのまま打ち捨てておいた。これに対して藩は、軽い者が慮外したならば打ち留めて居けるべきところ、その心掛けがなく致し方が不始末至極無調法であるとして隠居を命じている。

## 身分秩序の動揺

このような身分の軽い者に慮外されたら、それを捨て置かず打ち留めるべきだとする方針は、原理的には江戸時代全体を流れる基調だろうが、とくに強調されるのは近世後期になってからのように思われる。それは、判例としてそうだけだけでなく、法令としても、例えば『雑書』寛政八年（一七九六）二月二十八日条（三六巻、五二頁）に次のようにある。

一 近年小者・中間并町人之風儀、古風を取失ひ目立候風俗之者間々有之、右風俗ニ准し、心得不宜、御役人并諸士へ対し、道除等不仕袖打同様ニて、会釈も無之罷通り候者多分有之旨相聞得、甚不埒之至候、向後急度申含慮外ケ間敷儀無之様為致可申候（中略）

一 御領内之者、在・町方共ニ、諸士へ対し、致乗打候之者有之様相聞得候、不埒之致方候、御城下并於御領内御家中は不及申、他領者たり共諸士と見請候ハ、慮外ケ間敷儀無之様為致可申事、（以下略）

このような諸士へ対し無礼を働くなど命じた法令は、遅くとも『藩法』上、四九六頁所掲宝暦二年（二七五二）十二月十日令以降、五七六頁所掲安永九年（二七八〇）十二月二十三日令、五九〇頁所掲天明元年（二七八一）十月朔日令、六〇五・六頁所掲天明三年（一七八三）五月二十九

日令など、何度か繰り返して発布されている。これらの法令には、相手が侍であろうと何ら遠慮しない町人・百姓の姿が描かれているように思われる。士農工商、さらにその下に被差別民を配置した身分制が、次第に動揺しつつあったのであろう。

それが何を原因として生じたのかは多方面から検討してみる必要がある問題だが、こと盛岡藩領については、宝暦以降の度重なる飢饉と百姓一揆を抜きにすることはできないだろう。また、武士の側も深まる家計の窮迫に伴い、とくに下級武士層では支配階級の一員としての意識が次第に薄くなっていたと思う。

⑨ 『覚書』明治二年（一八六九）四月二十六日条（明治編、六五一頁）

その一例になるかどうか分らないが、明治二年に次の事例がある。野辺地忠蔵がかねて馴染んでいた生姜丁（盛岡市）末吉姉「さと」の所へ熟酔して行き、その母が過言したといって切り殺したのに対して、女のことだからどのようににでも取り計らい方があっただろうに、そうはせずに切害し、そのうえ事件を早速届けなかったのは不始末至極だとして、忠蔵に対し親類へ預けて隠居の逼塞を申し渡している。町人の女と馴れ合い、その女の所へ熟酔して通う武士、その武士に過言する女の母親、このような状況は何も幕末維新期だけに限らないかもしれないが、いささか退

麝臭を感じるのはわたしだけだろうか。

ここではこれ以上立ち入らないが、無礼討ちという身分秩序を鋭利に示す法制も時代の動きに連れて動揺を来たし、むしろ藩がその存在を強調せざるを得ないほど、その実効性が低下したといえるのではないだろうか。<sup>(1)</sup>

(1) なお、仙台藩における無礼討ちの諸事例について、吉田正志『仙台藩の罪と罰』（慈学社出版、二〇一三年）「六 無礼討ちのはなし」（四七頁以下）参照。

## 第六節 座頭仲間の仕置

### 当道座

盛岡藩『文化律』第一一三条「御仕置仕方之事」に「座当御仕置」という項があり、そこには、「惣録え科之次第申聞、座法二可申付之旨申渡」とある。座頭（座当）というのは、視力に障碍があり、琴・三味線などの音曲や鍼・灸・按摩などの療治に携わって生活をしている人々のことである。江戸時代には、このような人々は「当道座」と呼ばれる団体に強制加入させられた。

この当道座には、上から検校・別当・勾当・座頭という階級があり、これを「官」と呼ぶ。この階級「官」がまたそれぞれ何段かの階層に分かれて、非常に厳しい座順が決められていた。その座順の頂点に立つ人が京都にいる職検校

で、重要案件は職検校を含む職十老しきじゅうろうと呼ばれる十人の人々で決定された。この職十老の役所を職屋敷という。

この京都職屋敷の指揮監督を受けて関東や東国の座員を支配したのが、江戸にいる惣録と呼ばれる人物である。したがって、冒頭の条文は、「座頭が罪を犯したときは、その罪の内容を江戸の惣録に報告し、当道座の法に従って刑罰を科すこと」という内容になる。そして、この条文は、江戸幕府の『公事方御定書』下巻第一〇三条「御仕置仕形之事」中にまったく同文の条文があるから、『文化律』の条文は『公事方御定書』のそれをそっくりそのまま引き写したものである。

この『公事方御定書』の条文には「従前々之例」と肩書きされているので、『公事方御定書』制定以前からこのようだったということを意味する。つまり、かなり古い時代から、罪を犯した座頭への刑罰は、その領主である大名ではなく、江戸の惣録が科していたというわけである。<sup>(1)</sup>

### 幕府の例

確かに江戸幕府の判例集である『御仕置裁許帳』<sup>(2)</sup>四には、天和三年（一六八三）五月二十九日の申し渡しとして、座頭意津一が自分の女房と本八丁堀一丁目（中央区）善兵衛店の金左衛門倅仁兵衛とが密通していると疑いを持ち、仁兵衛に疵を負わせ、また仁兵衛と一緒にいた金兵衛をも

切り殺したため、岩船検校に渡され、「座等仲ケ間之任法ニ」せ、簀巻きにして佃島の沖に沈められたという記事が載っている。

また、貞享元年（一六八四）十一月二十二日の判決として、相州大上村（神奈川県綾瀬市）彦右衛門女房「じよこ」が同村座頭遊立と七年前より密通して、遊立が本夫を九月十九日夜に切り殺して召し捕らえられ、「じよこ」はその所において死罪になる一方、遊立は杉山検校へ渡された。この遊立がどのような刑に処されたのかは不明だが、やはり簀巻きにでもされたのではないか。このように、当道座では、座の構成員を厳しく支配するため、その一つの手段として死刑をも含む刑罰を科すことを幕府が認めていたのである。

### 盛岡藩の例

それでは、幕府の座頭仕置法をそのまま受け入れた盛岡藩ではどうだったろうか。『雑書』のなかに関係記事が三件あるので、それを紹介する。

- ①『雑書』寛永二十一年（『正保元、一六四四』）八月二日条（二巻、四〇頁）

座頭永春が七月二十六日の晩に大泉寺（盛岡市）に盗みに入り、弟子の拾・帷子などの品々を盗み取った。これを座頭の頭田都が聞き付け、永春に縄を懸け成敗しようとし

たところ、大泉寺が詫言をしたため、成敗はせず家中追ひ払いにして仙北（秋田藩領）へ遣りたいので、雫石（雫石町）の通り切手を出してほしいと願ひ出、これが認められた。

- ②『雑書』天和二年（一六八二）十二月十七日条（四巻、九六〇頁）

これは座頭が被害者の例である。去る十五日の晩、検校弟子の良学が長町（盛岡市）から大勝寺前（同）への通りで切り殺されているのが発見された。翌朝に町奉行が報告を受け、勾当・年行事などの座頭どもへ連絡して死骸を引き取らせた。加害者は結局分らないままだったようである。この事例は当道座の刑罰権が発動されたわけではないが、座頭が切り殺されたことを勾当等に連絡して死骸を引き取らせているので、当道座の結合の強さを示しているといえるだろう。

- ③『雑書』元禄十四年（一七〇二）五月十一日条（七巻、六六七・八頁）

四月十七日に遠野の横田海道（遠野市）で、古春・春庭という二人の座頭が一人の男と道連れになり、道ばたで休んだとき、古春がたばこを吸おうとして男から火をもらったところ、その男が「渴人」と分かり、渴人ならば火をもらうことなどしいといったことに男が腹を立て、口論になって男が春庭を堰の内へ突き倒し、今度は古春が男に組

み付き、春庭も起き上がって、二人して男の首に縄を懸け引つ張つたところ、首くくりの状態になって男が死んでしまった。この事件を中村勾当と植岡沢都が座頭二人を取り調べ、「座頭の仕置ニ仕度由申出」たのに対し、「勝手次第成敗仕候様ニと申渡」があり、五月十日夜に古春が円光寺（盛岡市）後で成敗となり、春庭は同道していただけと判断され追放とされている。

なお、この被害者の「渴人」であるが、この語は本来「飢え人」の意味であろうが、ここでは「渴人」ならばたばこの火を貰わなかったと古春がいつているので、火食を共にすることが忌避された被差別民である乞食と考えるべきだろう。座頭自身が差別を受ける身分だったのだが、その座頭がさらに乞食を差別するという、差別意識の階層性が窺われる。

### 座頭仕置は初期のみ

以上、座頭仕置の事例を幕府と盛岡藩についてみたが、実は当道座がその構成員に刑罰を科しているのは近世初期だけで、例外はあるだろうが、十七世紀も半ばとなると当道座が直接死刑を執行するようなことはなくなり、ほとんど幕府や大名の手によって座頭の死刑が執行されるようになる。

例えば、座頭仕置として石小詰めとか松明炙りといった

刑罰の執行がみられる会津藩（松平家）でも、『家世実紀』寛文七年（一六六七）六月三日条（二巻、三三八頁）によれば、密通の座頭とその相手について、「座頭の儀、其仲間ニ刑法可有之候間、座頭共へ相渡、仲ヶ間の刑法ニ成」すのも一方法だとしながらも、最終的には会津藩が兩人とも在所において磔を執行している。

世の中が次第に安定してくると、当道座の方では座構成員の統制に残酷な刑罰を科す必要が少なくなったり、あるいはそもそも残酷な刑罰を回避するようになったのではないだろうか。一方大名の側も、刑罰を科すことについて座頭を特別に扱う必要はないという意識が強くなったのではないか。このような双方の思惑が一致して、次第に座頭仕置が行われなくなったと思われる。

### 配当座頭

それでは、何も当道座などという仲間を維持する必要もなくなったのかというと、決してそうではない。それは、何よりも金品を得る手段としてきわめて重要だったからである。

そもそも盲人は、鳥追い・春駒・万歳など近世の被差別民的雑芸能者と同様、年始・歳暮や吉凶のときに家々を訪れて施し物を貰う慣行が全国各地にあり、この民衆から盲人に与えられた物を配当と呼び、またそれを座内で配分し



た分け前も配当と称した<sup>(4)</sup>。さらに、当道座への施し物は、単に民衆からだけでなく、大名や武家から与えられる場合もあった。例えば、庄内藩（酒井家）では、享保八年（一七三三）の若殿様の婚礼の際、鶴岡（鶴岡市）と酒田（酒田市）の両城下惣座頭へ銀五枚が配当として与えられ、以下藩主の昇進、姫君の誕生などの祝い事や法事のときに金銭や米が与えられている<sup>(5)</sup>。

こうして得られた金品を座の構成員で分けるのだが、多くの大名領にはそのような配当の分配を司る支配役（仕置役）がいて、またその下に城下なら座元、郡中なら組頭などと呼ばれた役人がいた<sup>(6)</sup>。その任命権は、最終的には京都の職十老だったようだが、あるいは藩の意向も考慮されたかもしれない。

盛岡藩の場合、先に掲げた③の事例で中村勾当という名前が出てきたが、この人などが支配役だろう。また、『雑書』文化五年（一八〇八）四月十一日条（四〇巻、六八頁）に、「戸沢検校今日着、於席謁之」という記事があるので、この戸沢検校も盛岡藩の支配役だったのだろう。このような支配役によって座頭各人が受け取る配当額が決められるわけだが、当然上位の者がより多くの分け前を貰えるようになっていいる。それゆえ、できるだけ多くの配当を受けようとして、座の構成員はより上位の官を得ようと努力した。

## 官金

ところが、上位の官を得るためにものをいうのは、やはり金だった。つまり、一級上がるためにはいくらかという金額が決められていて、それを京都の職屋敷に納めなければならぬ。この金を「官金」と呼んでいる。冒頭に当道座には検校・別当・勾当・座頭の官があるといったが、さらに正確にいうと、座頭の下に打掛、その下に初心（無官）という階級があったようで、初心から打掛になるためには四両、打掛から座頭になるためには八両が必要だった。さらに、座頭が勾当になるためには、各階層を順次上がっていくと全部で一六四両、以下勾当↓別当は二八二両、別当↓検校は一七〇両で、最下級から最高位になるには七一九両という膨大な金額が必要だった<sup>(7)</sup>。

したがって、ぜひとも上位の官に上りたい座員は必死で金を貯めたようで、その主要な方法が高利貸しだった。江戸ではこの貸し金を「座頭金」「官金」「盲金」と呼んだ。しかもこの貸し金は高利であるばかりでなく、実にあくどい取り立てをしたことでも有名だったようで、借りた者が武士の場合は、その家の玄関口で大声で催促をしたりして難儀をかけたそうである。

## 『たとへは』の意見

上記の官金事例が盛岡藩領内にも当てはまるのかどう

か、よく分からないが、大河内貞著の『たとへば』に若干の関連記事がみられる。一つは、『たとへば』国、一六四頁の検校・勾当に扶持を与える必要はない、配当錢で渡世ができるという指摘である。盛岡藩が支配役の盲人にどのくらいの扶持を与えていたか詳細は不明だが、わたしの氣付いたところでは、『内史畧』后六（四卷、三九三・四頁）に、文化四年（一八〇七）に取り立てられた戸沢検校に金方十八両五人扶持が与えられたという記事がある。もちろん時代によっても、また人によっても違いがあつたろうが、何らかの扶持が与えられていたことは確かだろう。

第二は『たとへば』家、二〇四頁の座頭の官金に関するもので、年々少くない額の官金が入納されていて費えの至りだといっている。盛岡藩は遠国で盲人も多くいるので、以後は座頭を四人ぐらい、打掛を四十人ばかりに限りたいと提案する。そして、集めた官金は惣録の座頭（支配役だろうか）が預かつて利殖に廻し、その利息だけを座頭本人に与えたいとも提言する。そして、配当錢について座頭が非分を募って騒ぐことがあるが、今後は吉凶とも向々の志次第に受け取るよう命じて、ねだりがましいことをさせないよう厳しく取り締まれともいう。おそらく盛岡藩領分でも、配当をめぐって座頭仲間と百姓・町人・武士との間に多くの紛争が生じていたのだろう。この辺りの事情については、もう少し調べてみたい。

(1) 当道ないし当道座についての概略は、さしあたり平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』（創文社、一九六〇年）三九一頁以下、石井良助『日本刑事法史』（法制史論集一〇巻、創文社、一九八六年）「第二一 座頭仕置」（四六七頁以下）、同『江戸の遊女』（第二江戸時代漫筆、明石書店、一九八九年）「二三 座頭金のこと」（二三五頁以下）などを参照。

(2) 石井良助編『御仕置裁許帳・嚴牆集・元禄御法式』（近世法制史料叢書1、創文社、一九五九年）一五一・二頁。

(3) 『家世実紀』正保二年十二月十二日条（二巻、二〇八―二一頁）。

(4) 加藤康昭『日本盲人社会史研究』（未来社、一九七四年）一九〇頁以下参照。

(5) 『町奉行所例帳』二「第十三 座頭 配当 献上」（鶴岡市史編纂会編『鶴ヶ岡大庄屋 宇治家文書』下（鶴岡市、一九八三年）九二頁以下参照。

(6) 加藤・前掲書、二二五・六頁。

(7) 加藤・前掲書、一八〇・一頁。

## 第七節 山伏仲間の仕置

### 山伏の仕置事例

江戸幕府の『公事方御定書』下巻にも盛岡藩の『文化律』にも関係条文がみられないが、近世初期の盛岡藩では、罪を犯した山伏を山伏仲間が処刑している事例がみられるので、まずはその判例を紹介しよう。

① 『雑書』正保三年（一六四六）四月十日条（二巻、一五六頁）

花巻役人より、山伏井之助の下人半太郎を勾引して売り飛ばした<sup>はなまき</sup>膝立村<sup>ひざだて</sup>（花巻市）の正学（正覚）という山伏を、今月六日に金剛院・覚善院・一明院の三人の山伏が簀巻きにしたと報告があった。この事例では簀巻きにして殺したとまでは書かれていないが、簀巻きにして川などに放り込んだのだろう。また、正学の捕縛や裁判がどのように行われたのかも不明ながら、おそらく藩の手で捕縛・裁判が行われ、身柄が山伏仲間に渡されて死刑執行が彼らに委ねられたものと思われる。

② 『雑書』 正保三年九月二十七日条（同上、一八二頁）

同年には、「田子原村之蓮花坊、宗旨成敗二可申付之由にて、今日自光院ニ渡ス」という記事もみられる。自光院（坊）は本山派山伏の年行事なので、蓮花坊はその配下だったのだろう。蓮花坊がどのような罪を犯したのか不明だが、山伏の宗旨による成敗が命じられている。

③ 『雑書』 慶安三年（二六五〇）四月二十五日条（同上、四三三頁）

今月七日の昼に大蔵女房が沼宮内<sup>ぬまみやない</sup>（岩手町）の大坊村岩瀬<sup>いはり</sup>張で来光の家に火を付けた。これにより大蔵女房は沼宮内で獄門と申し渡され、大蔵はその夫であるということとで、「山伏之作法ニ死罪ニ可申付」しと、自光坊名代の金剛院・川又村<sup>かわまた</sup>（盛岡市）年行事西福院へ申し付けられた。なお、火を付けられた来光は、届けなく放火犯大蔵女房を

切り殺した科でまず牢舎となっている。大蔵は、山伏の作法で死罪にせよと山伏年行事に命じられているので、やはり山伏だったことが明らかである。ただし、どのような方法で処刑されたのかは分からない。

④ 『雑書』 慶安四年（二六五二）十一月六日条（同上、五七一頁、『刑事』六頁、二六五頁）

江戸で銀の「きつたて」（切立鞆のことだろう）を盗んだ三戸<sup>さんこ</sup>（三戸町）正知院の弟子覚甚が永福寺<sup>えいふくじ</sup>（盛岡市）へ渡されて、「耳鼻をそぎ追放」と申し渡された。

⑤ 『雑書』 承応二年（一六五三）六月二十二日、十二月二十六日条（同上、七二四頁、七九五頁、『刑事』六・

七頁、二六五頁）

嶽妙泉寺<sup>たけみづせんじ</sup>（花巻市）現住常法院が常法院下人喜助の女房に墮落<sup>だらく</sup>したことが判明し、永福寺<sup>えいふくじ</sup>により六月二十一日に新山船場<sup>しんざんせんば</sup>の河原で耳鼻をそぎ、鬼柳境<sup>おにやなぎさかい</sup>（北上市）から追放された。女は奉行所に渡されている。ところがその後、喜助女房と密懷していたのは常法（宝）院だけでなく、山伏長善も同様だったことが分かり、十二月二十三日に大迫<sup>おおはらま</sup>（花巻市）において、「長善石積之罪科行之」旨の報告が自光坊よりなされた。真言取り締まりの永福寺による墮落への刑罰が耳鼻をそいで領外追放だったのに対して、山伏によるそれは石積みによる死刑である。両者間になぜこのような違いがあったのか、その理由はよく分からない。

⑥ 『雑書』 明暦二年（一六五六）三月十八日条（二巻、一七頁）

下田村（盛岡市）の山伏長円と市川村（八戸市）の山伏大法院の間で公事が生じ、関係者の証言で長円は科人でないとのことであったので、『右大法院科人二候ハ、山伏之作法ニ可申付』と自光坊に申し渡された。どのような内容の公事なのか、またいかなる刑罰が科せられたのか、いずれも不明だが、ここでも山伏の作法が生きている。

⑦ 『雑書』 延宝三年（一六七五）十二月二十三日条（三巻、七〇二頁）

花巻で刀を盗んだ大泉という山伏について、広福寺（盛岡市）へ成敗の件を尋ねたところ、「重科之者其上神子・山伏為令見二候間、俗方之御成敗被仰付、神子・山伏ハ其場へ遣可申由」との回答だったので、藩主の意向を得て、そのように処置することになった。

江戸に東叡山寛永寺（台東区）が創建されたのち、羽黒派山伏はその下に配属され天台山伏になったので、大泉は羽黒派の山伏だったのだろう。この大泉の盗みについて、神子・山伏のみせしめにしたとの理由で藩による処刑が求められていて、それは明らかに公開での処刑だから、逆にいうと、山伏の作法による処刑は公開ではなかったということになるうか。いずれにせよ、ここでは、山伏仕置ではなく盛岡藩による仕置が寺院側から求められている点に

注意しておきたい。

⑧ 『雑書』 延宝六年（一六七八）十月晦日条（四巻、二三四頁）

花巻でいたずらをした行者を大勝寺（盛岡市）が詮議をしたうえ成敗したと報告があった。詳しい内容はまったく不明だが、この事例ではこれまで通り山伏仕置が行われている。

⑨ 『雑書』 延宝七年（一六七九）七月二十八日条（同上、三三八頁）

明王院支配下の秀玄という行者が旧冬盛岡城下町でいたずらをしたので、戒めておいたところ逃亡した。この夏に立ち戻ったので捕らえておいたが、またまた逃げ出して所々でいたずらを繰り返した。このたび黒沢尻（北上市）で発見して行者や百姓が捕らえようとしたものの激しく抵抗してけが人も出る始末だったが、ようやく捕らえた。このように秀玄は「トカク徒者二相キワマリ候間、成敗仕度」と明王院が申し出、「則成敗可仕旨」が明王院へ藩から申し渡された。

⑩ 『雑書』 延宝九年（一七八一）七月十日条（同上、六六〇頁）

冬部村（葛巻町）の山伏新蔵坊が五月に五戸町（五戸町）多兵衛の下人七郎を切り殺した罪で、山伏西福院へ渡されて殺害された。

## 他地域の山伏仕置

以上、山伏仕置の事例を十件ほど挙げた。この外追放の事例もあるが、それは省略する。そして、死刑に処した事例はこの⑩が最後のように思われる。以後は、追放・手錠・修験道召し放し(還俗)などが処罰例として挙げられる程度である。

このように盛岡藩の山伏仕置は近世初期に集中してみられるが、他地域ではどうだったのだろうか。実はこの点はまだほとんど研究していない。しかし、石子詰めという死刑が比較的遅くに実行された事例としては、明暦元年(一六五五)の出羽羽黒山(鶴岡市)や寛文十二年(一七二二)の土佐(高知県)が挙げられる程度のようなので、おそらく他地域でも同様の状況だったのではないだろうか。

なお、普化宗でも不埒な虚無僧が出ると、生きたまま棺に入れて穴に埋める死刑なども行われたようなので、これも検討課題である。盛岡藩にも近世中期に「虚無僧寺松岩軒」などという名前が出てくるので、無視するわけにはいかないだろう。

(1) 岩手県編『岩手県史』五巻・近世篇二(岩手県、一九六三年) 一三六四頁。

(2) 同上、一三四三頁。

(3) 平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』(創文社、一九六〇年)

三五五頁註(3) 参照。

(4) 同上。

## 第八節 乞食仲間の仕置

## 幕府の非人仕置

江戸幕府の『公事方御定書』下巻第一〇三条「御仕置仕形之事」の最後に「非人御仕置」という項があり、「穢多弾左衛門え渡、仕置可致旨申付、但、遠国非人ハ、其所穢多頭え仕置申付候様申渡」と記されている。

江戸には、各種の被差別民が住んでいたが、そのうちの大きな集団は非人と穢多であった。非人は、行刑の手伝い、死んだ牛馬の皮剥ぎ等の各種業務を果たしたが、自己収入の主なものとは物貰いと紙くず拾いだった。江戸には何ヶ所かの非人が集住している場所があり、規模の大きいのは、寛政十二年(一八〇〇)の調査で、浅草(台東区)の三百六十八軒と、品川(品川区)の二百三十六軒ほどである。この軒というのは小屋数で、この小屋のなかに小屋頭と、その小屋頭に從っている抱え非人がいたから、人数はずつと多くなる。そして、浅草の非人集団を支配している非人頭として車善七、品川のそれとして松右衛門という人物がいた。

この非人集団は全体として穢多頭の弾左衛門の支配下にあった。穢多というのは、非人が剥いだ牛馬の皮を加工す

ることを主な生業としている被差別民で、弾左衛門は江戸や関東に住んでいる穢多を支配している人物である。したがって、穢多頭の弾左衛門は、穢多と非人を中心に、その他数種の被差別民を支配下においていた人物ということになる。

この弾左衛門は太鼓や雪駄などの革類と灯芯の製造・販売を独占的に認められており、豪勢な生活振りだった。浅草の当時新町と呼ばれていた場所に一万四千坪余の集住地をもち、その屋敷は二千六百坪ほどあって、一万石の大名の屋敷にも劣らないといわれている。

冒頭の「非人御仕置」の条文は、穢多頭弾左衛門の支配下にある穢多や非人が罪を犯した場合は、その身柄を弾左衛門に渡して弾左衛門の法で仕置するよう申し付ける、ただし、弾左衛門の支配を受けない遠国の場合は、その地域の穢多頭へ同様に申し付けるという内容である。それゆえ、先にみた、罪を犯した座頭を座頭仲間の法で仕置する座頭仕置と同様、非人仕置は、罪を犯した穢多・非人を弾左衛門が支配する穢多・非人仲間の法で仕置せよということである。

なお、江戸には、この非人頭の支配に属さないけれども、物貰いをして歩く「野非人」などと呼ばれる非人もいた。この野非人についても特別な仕置があったが、説明が煩雑になるので、ここで述べるのは非人頭の支配下にある

非人についての仕置に止める。

### 『文化律』には「非人仕置」なし

ところで、幕府の『公事方御定書』下巻をモデルとして制定した盛岡藩の『文化律』の第一―三条「御仕置仕方之事」には、この幕府の「非人御仕置」に対応する条文がみられない。確かに盛岡藩では非人という語が公式には使われないようなので、「非人御仕置」がなくて当たり前のようにも思われる。しかし、非人と同様に物貰いなどを生業とした乞食がいたので、「乞食御仕置」の条文があってもよさそうだが、それも無い。なぜなのだろうか。この疑問を解くため、乞食による犯罪がどのように処理されたかを判例を通して確認しよう。

①『雑書』天和元年（一六八二）十月四日、十一日条

（四卷、七一七頁、七一九頁）

黒沢尻通り横俵（北上市）の乞食道心が平沢村（同）の左平次所へ盗みに入り、花巻で詮議して牢へ入れ、藩主の意向を伺ったのに対して、「横俵乞食中間之者へ相渡、仕置可為仕」と命じられた。この指示に基づいて乞食仲間へ身柄を渡し、「如何様にも作法次第仕候様」と申付候所、豊沢（花巻市）落合にて棒にて打殺候」と花巻から報告があった。この事例は明らかに乞食仕置で、犯罪事実の認定は藩が行っているが、どのような刑を科すかは乞食仲間

よって決められ、その刑の執行も仲間の作法次第というところで、棒で打ち殺すという方法が採用されている。

- ② 『雑書』天和二年（二六八二）八月二十三日条（同上、九〇一頁）

ところが、翌年には、見前村（盛岡市）で穂切りの盗みをした飯岡村（同）の乞食女が牢屋において打ち捨てとされている。これは藩による死刑執行であることは疑いない。

- ③ 『雑書』元禄二年（二六八九）八月六日、二十九日条（五巻、六四七頁、六五九頁）

八月六日の朝、太田友悦宅に吉蔵（由蔵）という乞食が来て、召仕の衣類を三点ほど盗んだのを召仕が見付けて捕り押さえた。勘定所へ引き連れて町奉行・目付の取り調べを受け、盗人に間違いないと認定されて牢舎のうえ、二十九日に成敗されている。どこで成敗されたかは記されていないが、藩による成敗であることはまず間違いない。

- ④ 『雑書』寛延三年（二七五〇）三月二日条（二二巻、二六八頁）

米倉悠門宅より衣類を懷中して出てきた者がいたので、追いかけて捕り押さえ見届けたところ、召仕の衣類を盗んだことが判明した。「乞食二候ハ、右筋合之者へ為見届、直々乞食へ相渡可申候、左も無之候ハ、籠舎可申付旨」を命じて徒目付に調べさせたとこ、乞食でなく永福寺門

前（盛岡市）の久助という者の第五郎八であることが分かったので、牢舎を申し付けた。これは、結果的には乞食による犯罪ではないことになったが、もし乞食ならば乞食に渡せと命じられていることが注目される。

- ⑤ 『雑書』宝暦七年（二七五七）三月九日条（二四巻、三八・九頁、『刑事』四七三頁）

二子通り横志田村（花巻市）の治郎左衛門等数名は申し合わせて、同村の与左衛門が肝煎を勤めていたとき、取り立てた物を上納しなかったり、お救い米を下されたときに百姓への手当が悪かったりと、村のためにならないとして、花巻川口町の乞食さんに頼んで与左衛門を殺させた。これにより二人が打首、一人が野田（野田村）へ追放、現肝煎が役取り上げとなった。殺人を実行した乞食さんは仙台領者だったようで、本所仙台へ追放となり、それを目明しによって申し渡されている。この場合、他領生まれの乞食であるため、藩の手によって仙台へ追放となっているが、それを申し渡したのが目明しであることに注意しておきたい。

### 乞食のあり方

わたしが気付いた乞食による犯罪は、以上のわずか五件だけで、そのうち領外追放となった⑤を除くと、乞食による仕置が一件、藩による仕置が二件、乞食だったら乞食に

渡せといわれたのが一件と、どうも明確なことがいえないような状態である。先例がこのような状態だから、『文化律』に条文を載せることができなかったのかもしれない。

しかし、わたしは、先例が不明確だったということよりも、そもそも盛岡藩における乞食のあり方が大きな要因になっているのではないかと思う。つまり盛岡城下には被差別民の集住地があったものの、その軒数はさほど多くはなかったであろうし、また農村部では各地に散在していたらしいので、例外はあるにしても、おそらく仕置を行えるほどの力をもっていなかったのではなからうか。

実際江戸の弾左衛門のような強力な支配を行える頭がいなければならず、上記⑤にみられるように、彼らの支配は目明しによって行われていたから——これは仙台藩でも同様——、乞食の処罰を藩が行うことに異論が出ることも少なかっただろう。乞食には、例えば婚姻が乞食同士で行われるなど、それなりの仲間の繋がりがあったことが推測されるが、江戸とは異なり、乞食の自治的結合がきわめて弱かったのではないか。それゆえ、乞食に刑罰を執行することを期待することは困難だったと思われる。これが『文化律』に「乞食御仕置」の条文をおかなかった理由ではなからうか。

### 『たとへは』の意見

なお、大河内貞は、盛岡藩の被差別民取り締まりについても意見を述べている。『たとへは』家、二〇四・五頁はまず、領内の穢多・非人はなほだ無礼だという。彼らは吉凶の家へ来て志を受けるが、雨落ちより内へ入ってはいけないことを厳しく申し付けねばきだと強調する。また、乞食は頭巾を用いているが、もつと目立つように散切りにすれば男女とも目印になるだろう。金銭を貯えて貸し付けているようだが、やせた土地に移すべきだ。往來の物貰いを吟味するため、町はずれの三ヶ所ほど場所を決めて立たせた方がいい。非人にも相応の役を申し付けて、町々軒下の溝さらいやごみ捨てなどをさせよともいつている。

この意見は、明らかに「差別する側」からの目線であるが、そもそも盛岡藩の被差別民については、まだ研究が不十分である。上記のように、大河内貞は穢多という言葉を使い、また『文化律』第五九条「三役請持公事定之事」の寺社町奉行請け持ちのなかに「目明并穢多之者」とあるので、盛岡藩にも穢多と呼ばれる被差別民がいたと思われる。確かに、仔馬の死産では穢多が来て死馬の皮を剥ぎ、尾と耳を切り取っていったという弘化三年（一八四六）の記録が紹介されているし、安政二年（一八五五）には、幕府の要請に従い、領内の穢多を蝦夷地に移住させている。しかし、穢多の実態がどのようなのかなどについて



は、ほとんど解明されていないのが現実である。これまでも幕末期の小屋頭の身分解放についての興味深い研究があるが、これ以外はほとんど未開拓といつていい。今後の研究の深化が必要である。

- (1) 石井良助『江戸の遊女』(第二江戸時代漫筆、明石書店、一九八九年)「四 非人のこと」(二四—六頁)。
- (2) 石井良助編『江戸時代の被差別社会』(明石書店、一九九四年 七四頁)。
- (3) 石井良助編『江戸町方の制度』(新人物往来社、一九六八年)四八五頁。
- (4) 『岩手史叢』三巻収録の『盛岡砂子』第三、六四頁に「北山 乞食町 報恩寺北後」とある。ただし、『南部叢書』一冊収録のそれでは「北山 穢多町 松坂の北半丁計向」(四六五頁)となっており、これが同一の場所を示すならば、著者星川正甫は、乞食と穢多を同一視していたことになる。ただし、前者の第四、一〇一頁の「万日」の項に「乞食町也」、後者の巻四、五四五頁の「万日」の項に「乞食町有り」と記される一方、前者の第四、一〇四頁の「一本杉」の項に「穢多の家有」、後者の巻四、五五〇頁の「一本杉」の項に「穢多あり」とあるので、ここでは乞食と穢多の区別がなされているように思われる。いずれにせよ、盛岡城下には少なくとも三ヶ所の乞食ないし穢多の集住地があったようである。
- (5) 具体的な軒数は不明だが、仙台城下小泉河原にあった「乞食小屋主」は、享保四年には一〇人だったようなので(鯨井千佐登「宮城」(東日本部落解放研究所編『東日本の部落史』Ⅱ 東北・甲信越編(現代書館、二〇一八年) 九八頁参照)、盛岡城下のそ

れらもさほどの違いはなかったのではないか。

- (6) 兼平賢治『盛岡藩における死馬利用』(同上書、一四八頁)によれば、死馬の皮剥ぎを行っていた「小屋の者」は、幕末期においては各村に普遍的に存在していたかは不明で、彼らは複数の村を抱えていたとみるのが妥当とする。ちなみに、享保四年の仙台藩の在方にいた「乞食小屋主」は七〇人で、平均して一三、四ヶ村に一人の割合だった(前註所掲鯨井論文、同頁参照)。
- (7) 吉田正志『仙台藩刑事法の研究』(慈学社出版、二〇一二年)三四・五頁、同『仙台藩の警察と牢』(国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書、大崎八幡宮、二〇一三年)三四・五頁参照。
- (8) 豊田国夫『代官所御物書役の日記——南部藩三戸物語——』(雄山閣、一九九〇年)六九頁。
- (9) 浪川健治『東北エリアの部落史』(註(5)所掲『東日本の部落史』Ⅱ)二一・二頁。ちなみに、同頁によれば、万延元年に、蝦夷地に移住させられた穢多が罪を犯した際の裁判権につき箱館奉行所との間で交渉があり、箱館奉行所は、幕府「公事方御定書」下巻の「非人御仕置」に従って盛岡の「小屋頭」に犯人を処理させようとしたのに対し、盛岡藩は、移住した「穢多」はすでに蝦夷地に差し出した者で、盛岡の「穢多頭」が取り扱うことはなく、また何ら指図を行うこともないと主張し、さらに領内の「穢多」への罰の宣告さえも目明しに引き渡して行っているとして主張して、犯人の処理を拒んだという。これも、「文化律」に「乞食御仕置」が規定されなかった証左の一つといえようか。
- (10) 阿部茂巳「元治元年小屋頭の身分解放」(『岩手史学研究』八六号、二〇〇三年)。

〔未完〕